仮留（かす）める、仮想（かさ）ねる

津波に流された写真の行方

2019年2月23日［土］-24日［日］
ららぽーとEXPOCITY 光の広場
（大阪府吹田市千里万博公園2-1）

［主催］大阪大学人間科学研究科附属未来共創センター／日本災害復興学会学術推進委員会／思い出サルベージ
［協力］大阪大学共創機構社学共創本部／ LOST & FOUND PROJECT／名古屋文理大学映像デザイン研究室

2011年に発生した東日本大震災に際しては、津波によって流された写真を拾い集め、元の持ち主に返そうという活動が次々に生まれました。「被災写真救済活動」と呼ばれるこうした活動は、被災した人々の「思い出」をサルベージする［引き揚げる、救い出す］もので、被災した人々が新たな生活を「過去と地続きのもの」として歩みだすという意味において大きな役割を果たしています。そうした被災写真救済活動はいま岐路を迎えています。発災から8年を迎えようとする現在、返却されえなかった被災写真は行く場を失い、「お焚き上げ」というかたちで焼却されるものも少なくありません。結婚式、お宮参り、家族や友人との旅行といった特別な日を写し取ったもの。子どもの日々の成長やペットの姿といったなにげない日常の光景を留めたもの。それらは東北沿岸部の当時の生活様式や文化を知る貴重な資料であるとともに、被災した人々の生の軌跡の断片です。

本企画では、損傷が激しいために持ち主の判別が難しいと判断された写真を並べ、それを見るあなたに、会ったことも、もはや会うこともないであろう誰かの生に触れてもらうことを願っています。写真を手がかりにして、ありふれた、しかしかけがえのない日常が不意に断ち切られたということを想像し、いつかどこかで降りかかるかもしれない／降りかからないかもしれないあなたの震災体験をかさねてみてください。少し遠くから、数多くの写真をひとつのまとまりとして眺めてみる。あるいは、そこに近づき、一枚一枚に目を凝らしてみる。それぞれの距離から「仮留（かす）める」、「仮想（かさ）ねる」ことで、そこに確かにあった生の記憶が継承されるささやかな契機となれば幸いです。

企画者一同

企画者プロフィール

岡部美香

1970年生まれ。大阪大学人間科学研究科准教授。専門は教育人間学。戦争、災害、公害などの「災厄」と呼ばれる出来事とその出来事を体験した人々の記憶について、教育を通していかに同世代・次世代の未体験者や〈未災者〉に伝えるかをフィールド研究の主要テーマとしている。また理論研究においては、阪神・淡路大震災での被災体験を踏まえ、多くの被災者が抱える言葉にならない／言葉を超えた体験にいかに向き合えばよいかを探究している。

溝口佑爾

1983年北海道生まれ。「思い出サルベージ」代表。2016年より関西大学社会学部助教。京都大学の大学院生だったころに東日本大震災が発生し、初めて訪れた宮城県亘理郡山元町で被災した住民からの要請を受け、津波に流され持ち主不明となった写真を救済するプロジェクト「思い出サルベージ」を立ち上げる。現在は写真を通じた地域の記憶継承に取り組んでいる。

高森順子

1984年神戸市生まれ。愛知淑徳大学コミュニティ・コラボレーションセンター助教。専門はグループ・ダイナミックス。2010年より阪神・淡路大震災の手記集制作を行う「阪神大震災を記録しつづける会」事務局長。2014年井植文化賞（報道出版部門）受賞。2011年より3年間、「人と防災未来センター」において災害資料を収集、保存、公開、展示する実務を担当。被災体験の分有の場の創出に関するアクションリサーチを継続している。

本企画の経緯

災害復興にかかわる研究者と実践者が「より良い復興のあり方」を探求する場である日本災害復興学会が創設10年目を迎えた2017年春、学会傘下の部会として関西災害アーカイブ研究会は発足しました。同研究会では、関西に拠点を置く研究者約15名が大阪梅田の会議室に集まり、議論の場を重ねてきました。
「災害アーカイブ」とは大まかにいえば「災害復興にかかわるさまざまな情報を記録・保存し、またそれらを利活用する営み」といえます。しかしその対象は幅広く、また近年の目覚ましい情報技術の発展によってそのあり方は日々変化しています。語り部や手記などの言葉、写真や映像といったイメージ、震災遺構や記念公園といった空間など、様々なかたちの災害アーカイブが、個別に、または相互に影響を受けながら「災害の経験を残し、伝える」役割を果たしています。同研究会では現在進行形の災害アーカイブの事例を共有することを通じて「災害アーカイブとはなにか」という問いを検討してきました。
そのなかで私たちは、他者の経験を容易く共有することはできないという「知り得なさ」と、自身の経験を容易く言葉にすることはできないという「語り得なさ」が、災害アーカイブという試みには本質的についてまわるということを確認しました。しかしそのような「知り得なさ」や「語り得なさ」という特徴に着目することこそが「より良い災害アーカイブのあり方」を考えるうえで大切なのではないかという考えに至りました。

今回、会場となるエキスポシティの提案を受け、大阪大学と思い出サルベージと共同主催というかたちで、東日本大震災における被災写真を展示する機会を得ました。その制作にあたっては、饒舌に言葉を重ねたり、スペクタクル映画のようにイメージを濫出せずに、そこにある「知り得なさ」「語り得なさ」を引き受けるような災害アーカイブを表現しています。
その意味で本企画は、他者の経験の「知り得なさ」や自身の経験の「語り得なさ」に向き合い、想像する場のデザインのあり方を探るひとつの社会実験でもあります。

関西災害アーカイブ研究会 座長
高森 順子

「思い出サルベージ」について

宮城県亘理郡山元町において、東日本大震災の津波に流され持ち主不明となった写真約80万枚を洗浄・デジタル化・データベース化して持ち主の手元に返していくプロジェクト。行政・自衛隊との連携の下、データベースや顔認識を駆使した返却方法をを編み出し、被災写真救済活動の一つのモデルを作った。2014年グッドデザイン金賞（経済産業大臣賞）受賞。
また、この活動から派生的に展開しているLOST & FOUNDプロジェクト（代表：高橋宗正）では、活動の過程で損傷が激しく持ち主の判別が難しいと判断され譲り受けた写真の大規模展示を行なっている。

これまでの主な展示活動歴
（「LOST & FOUD PROJECT」による）

AKAAKA（2012年 1月11日－2月11日，東京），ヒロシワタナベスタジオ(3月8日－25日，ロサンゼルス），アバチャー・ファウンデーション（4月2日－27日，ニューヨーク），現代写真センター（6月5日－7月1日，メルボルン），フォトギャラリーインターナショナル（7月2日－8月31日，東京），東川町国際写真フェスティバル（7月28日－29日，北海道），インターセクションフォーザアーツ（9月12日－10月27日，サンフランシスコ），ローマ現代アート美術館（9月20日－10月28日，ローマ）など

箪笥の引き出しに眠っていたアルバム。コルクボードに無造作に貼られていた写真。はからずもそれらは津波によって多くの人々の目に触れることとなった。
被災写真はどれも誰かの記憶の断片である。そのなかには返す宛を失ったものが幾つもある。それらに触れる場をつくることで、遺された写真の新たな行方を考える。

■トークセッション
「被災した写真を見るということ」

2月24日［日］14:00-16:00

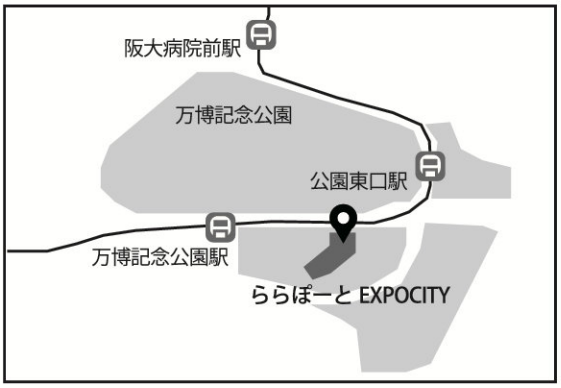
災害の記憶を伝えるために〈モノ〉を遺し継承するということ――特に、実際に被災した当事者ではない人々に災害の記憶を伝え、遺し、継承すること。こうした事柄の意義と課題について、「被災した写真」を見る（あるいは見せる）という本展示での試みを通じて、企画者が鼎談形式で議論します。

予約不要・入場無料でどなたさまもご参加いただけますので、ぜひお越しください。

【登壇者】
岡部美香、溝口佑爾、高森順子
（登壇者のプロフィールは本紙内面をご覧ください）

■アクセスマップ

大阪モノレール万博記念公園駅より徒歩2分。



詳しくは、ららぽーとEXPOCITYの公式ウェブサイトをご覧ください。
https://mitsui-shopping-park.com/lalaport/expocity/

■お問い合わせ

岡部美香（大阪大学人間科学研究科）
［メール］ mioka@hus.osaka-u.ac.jp

大阪大学 OSAKA UNIVERSITY × EXPOCITY 大阪大学大学院人間科学研究科 附属 未来共創センター